

<趣旨>

文学は文化的動態を言語表現として映し出すものであるから、ひとつの文化圏を構成する人々が共有する精神構造とその歴史を探るうえで、絶好の材料となる。よって文学は地域研究に欠くことのできないジャンルであり、他のディシプリンの研究者にとっても必須の基礎的情報を提供するはずのものである。人間文化研究機構が中心となって推進されている現代インド地域研究の、「言語、文学」部門を分担している FINDAS (東京外国語大学拠点) 文学班では、多言語状況を呈する南アジア地域の各言語による文学の、本邦における研究環境を整え、将来の更なる研究進展に資するためにも、指南書としての文学研究ハンドブックの必要性を痛感し、刊行をめざすこととした。

一年先行して進められているインド文学史科研では、歴史的観点から、多言語諸文学間の動態を解き明かすことを主眼としているが、ここでは、現代を中心として文学状況をありのままに紹介することに徹し、論考は含まない。また、ネット検索が機能強化された今日、断片的な情報は容易に手にはいるものの決定的に欠落していると思われる体系的記述と研究指南書的作用をになうものとした。

<想定される購読者>

1. これから南アジアを本格的に研究しようとしている大学生。
2. 既に南アジアを専門としている他のディシプリンの研究者で、文学について調べたい場合。
3. 文学全般に関心のある一般読者が南アジアの文学についても知りたいと思ったとき。
4. 南アジア全般に関心のある一般の人々で、文学にも興味をもったとき。

<概要>

1. 書名『南アジア 文学研究ハンドブック』(仮)
2. ページ数： 250 ページ程度？
3. 出版社： ??
4. 刊行予定：2014年12月
5. 執筆者：文学史科研メンバーを中心に、必要に応じてそれ以外にも依頼。

<内容・要素>

1. リファレンスとしての役割
 - ・作家名、作品名、出版情報、翻訳(邦訳)情報、
 - ・ビブリオグラフィー
 - ・作家協会、文学サークル
 - ・文学雑誌
 - ・文学賞
2. 入門書的な役割
 - ・各言語の文学史(前史～現代へ)概略
 - ・作家、作品ごとの概説
 - ・評論・研究史(インド内、外の動向)

<内容・構成>

序・・・南アジアの各言語による文学を学ぶ人のために

言語ごとに：1/3 執筆者の「思い入れ」中心に特徴が分かるような全体の概説<読者の関心を引く>

2/3 リファレンス、研究ガイド

巻末・・・年表(言語ごとに色分け?) インデックス

(執筆予定者) (割り当てページ) 案

ヒンディー：石田 30 p.

ウルドゥー：萩田 30 p.

ベンガーリー：丹羽 30 p.

オリヤー：杉本 15 p.

パンジャービー：岡口 30 p.

スィンディー：萬宮 10 p.

グジャラーティー：井坂 15 p.

マラーティー：小磯 20 p.

テルグ：山田 15 p.

カンナダ：太田 15 p.

タミル：高橋(孝) 20 p.

マラーヤラム：古賀(栗屋) 15 p.

英語：井坂 30 p.

シンハリー：野口 15 p.

パシュトゥー：登利谷○ 10 p.

バローチー：村山○ 10 p.

カシュミーリー：拓○ 10 p.

ムンダ諸語：長田○ 10 p.

サンターリー：高島先生のお知り合い コラムを英語で書いてもらって和訳するのは？

ネパーリー：?? (コラム形式もあり?)

ネワーリー：

アッサミー：

マニプリー：

ゾンカ(ブータン)：今枝 15 p.

サンスクリット：高島 15 p.

パーリ：？

その他のプラークリット：？

<手順>

1. 各言語取り纏め責任者の正式な依頼・・・2012年5月19日(文学史科研・研究会)その他個別に
2. グループ(or個人)で項目(不可欠な作家、作品、キーワード、関連する古典作品、必須事項)の選定
3. 出版計画の最終決定、出版社との打ち合わせ・・・2012年12月
正式な執筆依頼(必要に応じて責任者による分担者<たとえばコラムなど>)・・・2013年1月
4. 原稿締め切り・・・2014年3月
5. 編集・校正・刊行・・・2014年12月